
タイムワープ！

ganma

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイムワープ！

【Nコード】

N9456Q

【作者名】

ganma

【あらすじ】

時間、場所を自由に移動できるベルト『シフトタイマー』。

3人の少年はそれをつかい、時空間各地をとびまわる！

……連載にできそうな設定の短編。

「いやっほおおい！」

夜、太陽が地球の裏側に位置する時間に、少年3人は腰の剣を抜き、ある研究所に突入した。

「て、敵襲ーっ！敵襲ーっ！」

天井の窓ガラスがいきよよく割れ、3人はそこから飛び降りた。数十体並んでいるパソコンをクッションがわりに踏みつけ着地すると、まわりでうろたえている科学者に強烈な蹴りをお見舞いする。

部屋の奥には、現代科学の最先端で作られたベルトが3本、防弾ガラスに囲まれていた。赤毛の少年はガラスにパンチしたがびくともしない。

「待っててオルグ！」

赤毛の少年、オルグは呼ばれた方を向く。するとメインコンピュータの前でキーボードをたたき、緑色の髪をした仲間の姿があった。見事ハッキングに成功したようで、オルグの前にあるガラスが開く。

「サンキュー、デビル！」

オルグはガラスの向こう側にあったベルトをつかみとると、デビルに投げわたした。デビルは落としそうになりつつもしっかり受け取ると、それを腰に巻いた。

「終わったか？」

今度は青い毛の少年が走って近づいてくる。手にもっている剣は血で紅く染まっていた。オルグはそれをみて少し顔をゆがめる。

「勘違いするな、殺しはしていない。」

「ああラクティス、足止めありがとな。」

オルグはベルトを一本渡すと、残りを腰に巻いた。青毛のラクティスも同じように腰に巻く。

「居たぞ、こっちだ！」

廊下から警官がぞろぞろ出てきた。さすが嚴重警備な研究所だ、警官も仕事が早い。

だが、3人を捕まえるには一步遅かった。

「悪いね警官さん、これもらっていくわ!」

オルグは腰のベルトにあるボタンを押した。するとオルグの姿が一瞬でワープし、消えていった。残った2人も続けてワープする。

ここはジュラ紀のジャングル。盗みを働いた3人が、剣を片手に戦いを終わったところだった。

「今日も暴走マシンを破壊っと。」

オルグは足元に散らばっている機械の破片を蹴り飛ばしながら、剣をしまった。

「最近多いよねー、違法に時空移動してくる事件。」

ディビルが散らばったマシンのパーツを拾い集め、四次元ポケットにしまいこむ。これは未来へ行った時に買った物で、いくらでも物の中に入れる事ができる。

「早く次の世界へいかないか?」

そういったラクティスは、ベルトに手を当ててイライラしていた。彼は剣技に長けた男で、戦っていないとストレスがたまるほどの戦鬪馬鹿だ。

「んじゃディビル、チューニング頼むわー」

オルグはパーツを拾い集めている少年に言うと、はいと返事が返ってきた。その後3人はベルトの機能でワープした。

盗んだベルトの名は「シフトタイマー」。ダイヤルを回して時間、位置を決め、そこに行くことができる夢のような機械だ。技術のが異常に進化した国「サンブック」が総力を上げて開発した代物で、オルグ達が盗んで使っている。そして今もワープしている真っ最中

だ。

「じきにつくよー」

ディビルが言う。彼は機械や科学知識に長けている、チームの頭脳役だ。

「場所は何？」

「サンブツクの都市、イーストシティ！」

ディビルの言葉が終わった直後に、エレベーターが止まる時のような感覚が3人をつつみこんだ。そして辺りは一瞬にして、人混みのひどい大都市になった。

「ジュラ期のジャングルの方が楽だな。」

「だな」

オルグはラクティスとどうでもいい会話をしたあと、辺りを見渡す。ちょうど近くのカフェがすいているようだったので、3人は一度休憩を取ることにした。

「で、フェアーは今どこに？」

ラクティスは席につくとすぐディビルに聞いた。ディビルは「待ってよ」と言い、ポケットから小さな機械を取り出した。

フェアーは、オルグ達と同じように時空移動ができる男だ。ただ彼の目的は「自身の利益と破壊衝動を満たすため」だ。オルグ達はフェアーに親を殺されたことがきっかけで、彼を追っている。

ディビルはボタンをカチカチ押すと、画面にイーストシティの地図がでた。

「じきにここで次元の歪みが起きるから、多分これで来ると思う。」

すると、ちょうど後ろから誰かの悲鳴が聞こえてきた。

「暴走マシンだーっ！」

突然、軍事用の大きな人型マシンが現れ、高層ビルを破壊していく。街の人間は一斉にパニックになり、叫ぶ者、逃げる者、祈る者、たくさん人間が蟻のようにうろたえていた。

「さて、行くか！」

オルグが言うと、3人は剣を抜いた。そして一斉に暴走マシンに飛びかかり、あちこちに攻撃を繰り返す。それに気づいた人間は、さっきのパニックから一転して野次馬になった。

「邪魔をするな！」

すると突然晴れた空から雷が降ってきた。オルグ達とはっさの判断でかわし、敵と距離を取る。しばらくして空中から男が降りてきた。

「毎回ご苦勞なこった、オーガナイザー……、いや、オルグ。」

男は暴走マシンの上に立つと、3人を睨み付けた。

「フェアー、会いたかったぜ」

オルグは暴走マシンの足から体、フェアーのいるマシンの頭へと飛んで近づく。

「なんでこんな事するんだ！」

彼は剣を力一杯降りおろした。だが、フェアーはマシンを操作し受け止める。

「弱い奴がでしゃばるな。」

次の瞬間、マシンの腕がおもいきりオルグを弾き飛ばした。地面にまっ逆さまに落ちていく彼を、ラクティスが片腕で受け止めた。

「勝手に飛び出すな。」

ラクティスは剣をしっかりと握り、敵を見据える。

「先にマシンだな。」

「おう！」

「了解ですっ！」

3人は一斉に散り、全方向から攻撃をしかける。フェアーはマシンをあやつって、攻撃をしかける。

「まずは貴様だ！」

マシンは腕を上げ、オルグめがけて降り下ろす。オルグは避ける

事もせずただ前に突き進んだ。

攻撃が当たる直前に、腕が火花を散らして地面に落ちた。付け根の部分にはラクティスが笑みを浮かべて立っていた。

「さすがラクティスっ！」

「世話かけさせるな。」

さらにオルグがマシンの傷口に剣を突き立て、さらにダメージを加えた。

「こんのおおお!!」

フェアーは自分の思い通りに行かないことが腹立たしくなり、マシンの両肩についているミサイルを発射させる。

「残念だけど使えないよー。」

フェアーの後ろで声がした。驚いて振り替えると、デビルがニコニコしながらマシンのコードをぶちきっていた。

「デビル、ナイス！」

オルグは親指を立てて合図した。デビルも親指を立てて返事する。

「れ、冷静にならなくては。」

フェアーは一度右手で顔をかくし、フフフと笑う。そしてマシンの赤いスイッチを押した。

「悪いな諸君、これから俺は時空移動する事にした……では！」

「なに?!」

オルグはフェアーに飛びかかり剣をつき出したが、寸前のところでにげられてしまった。

「また逃げられたっ……」

オルグは拳を握り、悔しげにマシンを殴る。

「警察だ、お前達を逮捕する！」

いつの間にか、辺りの野次馬は消え、変わりに警察がひしめきあっていた。

「警察の野郎、タイミング良すぎだぜ。」

ラクティスは愚痴をこぼすと、ベルトに手を当てる。

「一旦退却だね。」

ディビルもベルトに手を当てる。そして、オルグにも時空移動の準備を促す。仕方なくオルグはベルトを作動させた。

「次こそ奴を捕まえてみせる！」

警察が取り押さえようと飛び込んできた瞬間、3人は同時に時空移動した。

「次はどこだ？」

「えっと、中世ヨーロッパかな？」

「っしや、いっくぞおーっ！」

時空移動を済ませ、また新しい世界へ降り立つ3人だった。

（後書き）

設定的には連載できそうなものなんですが……

技量がないのですorz

アイデアは出るのに連載書く勇気がわからない……。

というか書けないです＼（＾Ｏ＾）／

設定欲しかったらもらっていってくださいな（え

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9456q/>

タイムワープ！

2011年4月11日15時25分発行